自閉症児の家庭生活スキルの形成と要因

—親の支援行動を促す標的行動の選定手順を中心に—

○山本紗也子　　村中智彦
（新潟県立村上特別支援学校）　　（上越教育大学　学校教育研究科）

KEY WORDS:自閉症　家庭生活スキル　家庭支援

【目的】家庭生活スキル（domestic skills、以下スキル）は、身辺自立や家事などの家庭生活を営む上での多様な活動を含んでいる（神山・野呂, 2010）。障害児者がスキルを形成し、家族の一員として日常の役割を担うことは大切な課題となるが（五十嵐・武蔵, 2005）、自閉症児では指示待ち行動が形成されやすく、スキルの自発遂行に困難が認められる（有川, 2003）。親のニーズや家庭独自のやり方から標的行動を選定しても自発的な行動生起が認められないケースがあり、子どもの標的行動の選定や親の支援方法の在り方が問題となる（五十嵐・武蔵, 2005）。生活者でもある親は、子どもの学習機会の設定や支援の継続に負担が生じやすい（高畑・武蔵・安達, 1999）。本研究では、親と協同して自閉症児2名のスキルを形成した。家庭の生活スタイルに即した介入を行った。実践を通じて、親の支援行動と子どもの標的行動の形成に関わる要因を明らかにすることを目的とした。

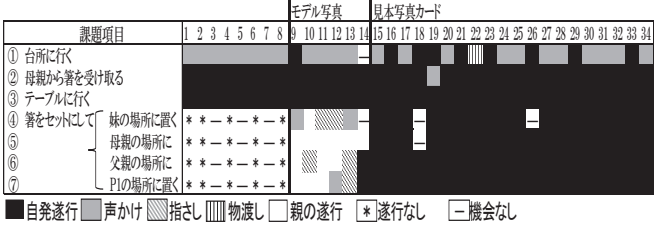
【参加児】小学校自閉症・情緒障害特別支援学級4学年のPDDの10歳0か月女児、特別支援学校小学部2学年の自閉症の7歳10か月男児（P1、P2）。P1の家族は父、母、P1、妹（年少）の4名。「はさみ片付けて」の簡単な言語指示を理解できた。嫌なことや分からないことで、手を噛む自傷があった。P2の家族は父、母、P2、弟（年中）、祖父、祖母の6名。「手洗って」の簡単な言語指示では、指さしや動作モデルを示すと理解できた。車の走る音に過敏で、窓の外を眺めるこだわりもあり作業中断も多かった。

【実施場所・期間・指導体制】参加児の家庭で、X年4月中旬から12月初めまでの8ヶ月。親が支援を行い、第一著者（支援者）は観察および記録、支援計画の立案、補助的な支援を行った。週1回程度、家庭や大学研究センターで、親への聞き取りや支援計画を協議した。**【事前アセスメント】**家庭での生活習慣や余暇活動で、家族が困っていることや改善して欲しいこと、参加児に身に付けて欲しいことの内容と程度を親に聞き取った。P1では指導対象の候補となる活動として16場面37項目、P2では15場面52項目が抽出された。また、日課活動の様子と技能レベル、支援に要する負担の程度を把握するため、調査用紙の記入を依頼した。親の支援が半分程度必要な場面は、P1では食事、洗面、手洗い・うがい、家庭学習、お手伝い、P2では食事、排泄、歯磨き、洗顔、着替え、手洗い・うがいであった。P1、P2ともに、お手伝いは認められなかった。

【標的行動の選定】標的場面及び標的行動を選定するため、家族の希望調査で挙げられた項目を13の観点から支援者と親で評価し、各項目について現在の実行状況を聞き取った。「参加児が既に有している技能で実行できるか」「親の指導ニーズがあるか」「支援機会が豊富にあるか」「親の支援に要する負担が少ないか」の4つの観点を満たす項目を優先して取り上げ標的場面を決定した。優先順位が高いものは、P1で夕食準備、洗濯物畳み、家庭学習場面、P2では手洗い・うがい、夕食準備、洗濯物畳み場面であった。第1候補の標的場面からビデオ撮影を依頼し、身に付けて欲しいことの内容や、ビデオ記録で観察されたがスキルが十分でない行動を標的とした。家庭独自のやり方や参加児の実行の様子を参考に、標的行動を課題分析した。**【介入手続き】**優先順位が高い標的場面から順に取り入れ、介入Ⅰ～Ⅲを行った。支援者は、介入期ごとに親に対して標的行動を確認した。支援方法を伝えて、親が家庭で実施した。参加児の標的行動を促す視覚手がかりを導入すること、参加児が既に有する技能を活用できること、親が既に実行している支援を活用できること、生活スタイルに即したものとすることに配慮した。**【分析】**ビデオ記録をもとに、参加児の標的行動をプロンプトレベル（レベル）で評価し、自発率を算出した。自発率とは全課題項目中、参加児が親のプロンプトなしで標的行動を遂行した割合であった。親の支援行動は生起、非生起、機会なしで評価した。

【結果及び考察】Table1に、P1の夕食準備場面における箸並べのレベルを示した。P1の既に有する技能である箸を置く動作を活用し、箸の見本写真カード（カード）を導入した。カードをテーブルに貼るという親の支援行動は生起が高かった。P1はカードの位置を手がかりにして、自発的に箸を置くことができた。「参加児が既に有している技能で実行できるか」の観点は標的行動選定に重要であった。Fig. 1に、P2の夕食準備場面における小皿並べの自発率を示した。介入では、箸を並べた後に小皿を並べたところ、箸の位置に合わせて自発的に小皿を並べる標的行動が認められた。自発率は100%が続いた。箸を置く行動が起点となり、その後の小皿を並べる行動が促されたと考えられる。箸を並べる、小皿を並べるという一連の行動連鎖において、その起点となる箸を並べる行動の生起を高めるためのカードの付加が有効であった。親にとってテーブルにカードを貼る支援の実行は容易で、自身の支援で子どもの望ましい行動が生起する成功体験が得られたことによって、親の支援行動が早期に認められたと考えられる。

Table 1 P1 箸並べのプロンプトレベルによる評価



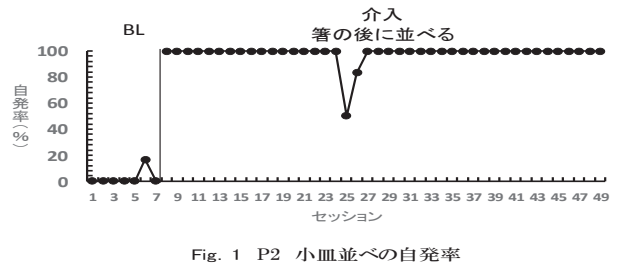


Fig. 1 P2 小皿並べの自発率

文献

有川宏幸（2003）特殊教育学研究, 41, 415-424.
五十嵐勝義・武蔵博文(2005)富山大学教育学部研究論集, 8, 31-42.
神山努・野呂文行（2010）特殊教育学研究, 48, 85-96.
高畑庄蔵・武蔵博文・安達勇作(1999)特殊教育学研究, 36, 9-16.

（YAMAMOTO Sayako, MURANAKA Tomohiko）